

はじめに

今回の研究会議が掲げているテーマである「伝道の神学」の「伝道」とは何かは、必ずしも明快ではない。ひとつの問題は用語法にある。多くの欧米文献の翻訳にあたって、近藤勝彦氏などは「Mission」に「伝道」を当てている¹。

一方、日本の福音主義サークルにおいては大方、「Evangelism」を「伝道」と翻訳し、それよりも広義であるとともに教会的な、あるいは異文化地域への働きなどを意味して使われていた「Mission」を「宣教」(あるときは「使命」と翻訳してきた。本稿は後者に従うこととする²)。

問題は、用語の使用法や翻訳のことだけではない。もっと本質的には、「Mission (宣教)」と「Evangelism (伝道)」それぞれの意味内容と、互いの関係の問題がある。このことについては、デイヴィッド・ボッシュの卓越した宣教研究である『宣教のパラダイム転換』下巻、265頁以下「エバンジェリズムとしての宣教」の項で、その定義や違いを明らかにする難しさを含みつつ、詳しく論じられているので、それに準じたい³。

すなわち、その議論のまとめとして書かれている、「エバンジェリズム (伝道)とは教会の宣教の要素であり、その活動である。それは、ある特定の条件と個々

¹ 『伝道の神学』5～6、134頁参照

² もうひとつ、「Evangelization」という語があり、それは多くの場合、「福音化」と訳される。その意味するところは人によって異なり、あるときには「伝道(Evangelism)」と、別なときには「宣教(Mission)」と同義に使われる。

³ デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換』下巻、新教出版社、1999年

の状況におけることばと行いによって、どんな所においても、すべての人およびすべての共同体に、その根本的な方向転換への直接的で確かな機会を提供するものである。その方向転換とは、奴隷がこの世とその力から解放されること、キリストを救い主、主として受け入れること、キリストの共同体すなわち教会の会員となること、和解と平和および地上における正義のための働きに加わること、キリストの支配の下にすべてのものを置く神の目的に自らを献げること、等々を含むものである。」(284～285頁)を基盤にして、以下、広義の「宣教(Mission)の神学」を視野におきつつ「伝道(Evangelism)の神学」を中心に考察することとする。

1. 福音主義教会の歴史における「伝道」概念と教会

とはいっても、伝道についての理解はいつも同一だったわけではない。それは、ボッシュがその著書、上巻・下巻の中心である第二部「宣教の歴史的パラダイム」で述べているごとくである。本稿に記されている「伝道」と「教会」の関係に絞ってみても、それぞれのパラダイムが特有の関係を持っていたのである。

ボッシュの前掲書の邦訳編集者である西岡義行氏は、「宣教と教会との関係」を類型化して、以下の4つのタイプに分けていて、わかりやすい。それは、第一のタイプ：教会の付属物としての宣教、第二のタイプ：教会の核としての宣教、第三のタイプ：教会を中心とした宣教、そして第四のタイプ：教会を越え世を軸とした宣教(神の宣教)である⁴。

ここで私は、20世紀の福音主義教会のサークルにおいて考えられ、実践されてきた「伝道(宣教)」観を、農業の類比を用いて、以下のように分類、説明してみたい。もちろん、これらの類型はみな典型的な表現をとっており、他の「伝道」をまったく含んでいないものはないと言っよい。そこに、最大の力点を置いている伝道観である。

⁴ 論文「プロテスタントにおける宣教と教会の相互関係」、『日本福音主義神学』第38号所収、2007

(1) 耕地伝道 Presence

この伝道は、キリスト教とまったくなじみのない社会に伝道を試みようとするときに、「何の準備なしに直接的に福音を語っても効果はない。まず、生活によって福音を見せ、人々のキリスト教に対する恐れや偏見を取り除き、好意をいだかせるようにする営みが必要だ」とする。そこでの伝道は主に「証し」と呼ばれ、教育、医療、福祉、社会正義などの間接伝道が推奨される。

(2) 種蒔伝道 Proclamation

世界中のすべての人に、その生涯において一度はキリストの福音を聞かせることが、伝道の中心的目標とされる。聞いた福音を信じるかどうかは本人の決断次第であるが、キリスト者(教会)の責任は、福音を届けて、信じる機会を提供することとなる。メディア伝道(文書、放送、インターネット)の多くや訪問伝道は、この面が強いといえよう。

(3) 結実伝道 Persuasion

これは、(2)の働きによってキリスト者の責任は終わったわけではないと考える。福音を届けた結果として、自分の近親者を含む、できるだけ多くの人が回心して救いを得なければ、愛する者を永遠に失ってしまう。だから伝道は、何とかして人々がキリストを受け入れるように説得しなければならぬ。教会での伝道集会、クルセード方式による大衆伝道、そして、「四つの法則」などを使っての個人伝道などが思い浮かぶ。

(4) 収穫伝道 Incorporation

(3)の伝道でキリストを受け入れる決断をした者は、すべて救われて永遠の命を得たとしても、彼らのその後の地上生活はどうかというと、すべてがその生涯をキリスト信仰に生きるわけではない。いや、むしろ、教会生活に結びつかない者や、信仰の成長を見ないまま数年で信仰を失ってしまう者が多いという現実がある。そこで、伝道はバプテスマを通して「キリストのからだ」である教会に組み入れることまでを目標としなければならぬと考えるのがこれである。教会統計で「バプテスマを受けた人数」が大きな位置を占めているところに、その伝道観を見る。

(5) 繁殖伝道 Reproduction

以上のような伝道観の変遷のあと、ドナルド・マクギブランによってさらに新しい伝道論が提案され、それは「教会成長論」と呼ばれた⁵。彼の伝道観を前述の農業的類比にならって表現すれば、繁殖伝道 Reproduction と言えるかもしれない。その画期的なところは、ひとつには「教会成長」という名の示すように、伝道を教会の本質的働きとして捉えたことにある。それに関連しているもうひとつは、それまでは(1)から(4)のように「点」として考えられる傾向の強かった伝道を、それらすべてを含みつつ「線」(プロセス)として継続反復的な視点から捉えたことである。それは当然、教会に加えられたキリスト者を弟子として訓練することを強調する教育的な働きをも含むことになる。

このように見るとき、「伝道」をどのように理解するかという基本的なことが、それと教会との関係を考えることに大きな影響を与える。私自身は、上述の5つの伝道観のなかでは、最後の「繁殖伝道」が総合的・体系的である点から最良と考える。すると、必然的に「伝道」は教会に結実するとともに、教会建設、教会活動そのものが伝道の一環をなしていることとなり、本稿での伝道の射程を示すことにもなる。

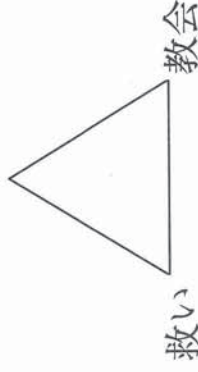
II. 「伝道」の目標としての救い

「伝道」の教会論的議論に入る前に、もうひとつ確認しておきたい前提的事項がある。それは、伝道によるひとりの人の救いについてである。福音主義教会がその伝道観の中心として決してゆずることをしなかつたことは、伝道のさしあつた目標としての「ひとりの人の救い」である。そうであれば、「伝道」と「教会」の関係を議論するときに、ひとりの人の「救い」とは何かを考慮に入れなければ十分ではない。

⁵ 『Understanding Church Growth - Fully Revised -』 Donald A. McGavran, Eerdmans, 1980 参照

＜伝道の目標としての救い 結実としての教会＞

伝道



「ひとりの人の救い」も、伝道がそうであったように、時間的な一点で成し遂げられるものではないと言えるが、ここでは、神学的な救済論の視点から考察してみたい。

A. 救いは、神の国に入ることであるだけに、それと同じ時間的・歴史的広がり(過程)がある。神の国のそれは、現在完了的な「既に(already)」と未来的な「未だ(not yet)」の緊張を持つ現実として説明されているが、救いに関しても同じことがある。また、「直説法の救いと仮定法の救いとの間」の緊張における命令法と言われているようなことがある⁶。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」(エペソ2:8)とともに「恐れおののいて自分の救いを達成してください」(ペリピ2:12)ともあるとおりである。

このように、確かにひとりの人の救いは、長い、あるいは生涯にわたるプロセスであることに鑑みて、1737年、ルター派神学者ヤコブ・カルポフは、「オールド・サルテイス」という用語をもって、それを記述し始めた。ここでは、啓蒙・悔い改め・救い信仰・再生・回心・義認・神秘的結合・聖化・堅信と保持など種々の恩恵の増進が考えられている。以降、ルター派(ホラッツ=ペリピ)、改革派(ベルコフ)、ウエスレアン・アルミニアン、バプテスタなどによって、

⁶ ボッシュの前掲書251頁でも触れられている。

それぞれの救済観に基づいたオールド・サルテイス（論理的・時間的順序づけ）が作られていった。ところが、それらに共通する問題は、救いにまつわる諸々の用語と概念を、論理的であれ（必ずしも時間的でなくとも）一直線上に並べようとしたことである。そして、それぞれのオールド・サルテイス間の差異がそれらの教派神学間における救済観論争激化に拍車をかけたと思われる。

それは確かに、聖書の中にある序列への言述例に根拠があるように見えるが（使徒26:17ff、ローマ8:29-30など）、それが救いの順序あるいは増進として述べられたものなのかという疑問が残る。さらには、救いに関する多くの用語を時間的・論理的一直線上にならべようとすることには、どうしても無理を感じる⁷。では、聖書が多様なかたちで表現している救いのプロセスを、どのようにならめることができるだろうか。

前述したような救いの現在完了的側面「所与」と未來的側面「約束」と同様、「直説法の救いと仮定法の救いと」間の緊張があるが、そこにおける「命令法」に相当することとして、次のことが考えられなければならないと思う。すなわち、救いが現実化するには、神の恵みが一方的に注がれるだけでなく人の信仰によって応答される必要がある。それを喚起するのが、地上における信仰生活において与えられた救いを継続・維持していくとともに深化せよとの「命令法」である（「課題」的側面）。それらを総合すると、救いについては現在完了的な「所与」に続いて現在進行的な「課題」があり、最後に「約束」としての完成があると表現するのが最良ではないかと考える⁸。

B. それでは、救いに関する多種多様な用語・モチーフはどう理解し、どう秩序づけたいのだろうか。オールド・サルテイスのように時間的・直線的配置以外の理解が可能であろうか。私は、人間の使う用語にはそれぞれ支配的（中心的）概念があるとの考えによって聖書を観察し、聖書は主に三つの概念によ

⁷ パルトも『和解論』Ⅲ/3、241頁以降において、オールド・サルテイス（救済の秩序）に疑問を呈している。

⁸ ミラード・J・エリクソンも『キリスト教神学・第4巻』（いのちのことは社、2006年）において、救いの時間的次元に言及し、それを、救いの始まり、救いの継続、救いの完成と区分して展開している。

る用語・思想によって説明されているとの結論を得た。それは関係概念、実体概念、目的概念であり、聖書的用語で換言すればそれは、契約法概念、生命概念、職能概念である。

このようにキリストの救いを三分類的に理解することは「ウエストミンスター一信告白」11、12、13章において、すでになされている。もちろん、概念、側面、次元による分類であるとの言明はないのではあるが。「力あるキリスト教へのパラダイム転換」を主張するクラフトも、キリスト教証言には三つの次元、すなわち、真理、関係、力の次元があると、これら三つの次元のバランスがとれていなければならないと述べている⁹。

さらに神学書以外のものとして、『「わかる」とはどういうことか』（山鳥重著、ちくま新書、2002年）は、人間が物事の理解、記憶、表現しようとするときには、「ことからの意味」「関係の意味」そして「変化の概念」があると述べている。それは、このような三概念を用いることが、この世での事象の意味を理解することにおいて、学問分野を超えた普遍であることを示唆している。

聖書においては、イエスによる「ルカ15章の三つのたとえ話」が救いの「所与」について三つの概念で語っている代表例である。「失われた羊」のたとえは救いを「いのちの回復」の概念で、「失われた銀貨」のたとえは救いを「目的（働き）の回復」の概念で、そして「失われた息子」のたとえは救いを「関係の回復」の概念で語っており、救いの物語にここでの代表的三概念を盛り込むことによって、その豊かさを知らせているのである。同様に、「マタイ25章の主を待ち望む生き方についての三つの話」が信仰生活の「課題」について、この三つの概念からの説明となつている。また、パウロも1コリント1:30では「義と聖めと贖い」、13:13では「信仰と希望と愛」の三語をならべているが、それらが、それぞれの概念系列に属するものであると理解するとき、パウロがなぜこのように三つの語をならべたかについて初めてよく説明できる¹⁰。

⁹ 福田充男編『宣教リレーディングス：日本文化とキリスト教、いのちのことは社発売、参照

¹⁰ これらひとつひとつについての説明と議論をここで展開することはできないが、私が担当している東海聖書神学塾での『神学概論』クラス用テキストでは詳述して

このような救いとその表現方法が持っている二つの側面、すなわち時間的次元と概念的系列をもって総合的に整理したのが、図表<救いの構造 (スキーマ)>である。救いには、回心とともに与えられる「所与 (直説法)」があるが、概念で区分けた下図に従えば、それは、義認と和解 (関係概念)、新生と聖め (実体概念)、贖いと召命 (目的概念) が同時に与えられることを表している。しかし救いには、信仰生活、教会生活における「課題 (命令法)」を残しており、それぞれの概念において「信仰 (神との関係) の堅持、深化」、「愛 (キリストの性質) に向けての成長、聖化」、また「望み (神の国完成の) を抱いての献身、

<図表> 救いの構造 (スキーマ)

	神の像 栄光	神の像 の毀損	真性の 神の像	回復した神の像 (救い)	
				所与	課題
関係 概 念	神との 交わり	断絶 疎外	神の子	義認 和解	神の国とその義とを求め続ける 信 (堅持) Great Commonlaw — 聖霊のバースペクティヴ — 御霊に満たされ続ける
実 体 概 念	霊の いのち	腐敗 滅亡	第二の アダム	新生 聖め	主を愛し、あなたの隣人を愛しなさい 愛 (聖化) Great Commandment — 聖霊のバースペクティヴ — 御霊の実を結びなさい
目 的 概 念	神から の委託	虚無 怠惰	しもべ なる王	贖い 召命 保証	自分の十字架を負ってついでにききなさい 望 (奉仕) Great Commission — 聖霊のバースペクティヴ — 御霊の賜物を活用しなさい

奉仕」がある。そして、神の国完成において「約束」されている救い (仮定法) も、それぞれの概念をもって「神と顔と顔を合わせたの交わり」「霊のからだに

いる。

よるよみえり」「神の国の相続」と表現することができる¹¹。

そのように、「ひとりの人の救い」を目標とする伝道も、回心による救いの「所与」で終わるものではなく、また、ただ将来の「約束」を与えるだけではない。それが、「所与」に基づきつつ「約束」実現に向かって歩み続ける「課題」を視野に入れることであるならば、信仰に歩む民の共同体である教会に主から託された使命も、このような時間的次元に沿いつつ三つの概念系列で表現される豊かな救いが実現することを考慮する必要がある。次章では、それを考察しよう。

III. 「伝道」の結実と、「伝道」のための装備の場としての教会

A. D・ワトソンは、正しく「伝道の結実 (purpose) であるとともに、担い手 (agent) である教会」について述べた¹²。それはまず、教会論を展開することとが、救済論とはもちろん宣教 (伝道) 論とも緊密に結びついていることを神学的に表現する必要があることを意味する。ところが組織神学における教会論の中では、「救いの手段」など救済論との関係が多く語られるのに比べて、宣教 (伝道) について語られることは少なく、それは、実践神学に委ねられてしまいう傾向がある。実際、現代のアメリカ福音主義における組織神学書であるM・エリクソン『キリスト教神学』(第4巻)、スタンレイ・J・グレンツの『Theology for the Community of God』(Stanley J. Grenz, Erdmans, 1994) にしても、伝道について2〜3頁を割いているだけである。

救済論においても、そのなかで宣教 (伝道) を不可欠な構成要素として語る組織神学は、カール・バルトの『教会教義学・和解論Ⅲ/3〜4』(新教出版社)を除いて私は知らない。そうすると多くの場合、キリスト者にとつての伝道 (宣教) が救いとは別なオプシヨン事項となり、教会においても伝道が、特別な献身者の働きとして理解される傾向を惹起してしまうのは当然ではなからうか。

¹¹ 私は、現代においては特に創造論と救済論を結び付けることのできる「神のかたち」が、重要かつ効果的であると考え、救いを「神のかたちの回復」として度々述べている。図表<救いの構造 (スキーマ)>でも、各項目を「神のかたち (像)」という語で共通させたが、ここでは、その詳細を述べることはできない。

¹² 『「Believe in Evangelism」 David Watson, Erdmans, 1976 の134頁以降を参照。

な教会へのかぎ』いのちのことば社、1998年）から大きな啓発を受けた。ここで、それを参考にしてみとめた、私の牧会している緑キリスト教会の〈使命（目的）宣言文〉を紹介する¹⁶。

＜緑キリスト教会の使命（目的）宣言文～改訂版～＞

私たちは、神のかたちに創造されている人々を神への礼拝に招き、キリスト信仰への入信と神の家族である教会への入会によって神と人とを愛する生活に導き、さらには彼らを献身せしめて、キリストに向けての成熟と賜物を用いての奉仕、世にむけての宣教に促すことにより、神の栄光をあらわす。

この、教会の6つの諸目的は聖書全体から抽出、総合したものであるが、以下の「イエスの三大訓」のなかに、命令法で語られているものでもある¹⁷。

(1) 大いなる原則 (Great Commonlaw) “だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。” (マタイ6:33)

この有名な言葉は、義を求める課題をもっとも端的に言い表したものである。これは「神を第一にしなさい」（優先順位の教え）ではなく、むしろ「ひとたびキリスト者に与えられた神の恵みの支配と、回復された神との正しい関係（義）を何にもまさって、いつも探し求め続けよ。そして、それに対する応答として感謝し、その関係を親密に生活し続けるようにせよ」ということである。「キリスト者生活の基本的原則」、

¹⁶ 教会の使命（目的）について、ワトソンは、新しく生まれたキリスト者を成長させるために教会のなすべきこととして、教育、交わり、礼拝、奉仕のための訓練の4つをあげ（前掲書7章）。リック・ウォレンは、礼拝、交わり、成熟、奉仕、宣教の5つをあげている。私は、以下に述べるごとく、6つの目的にまとめている。

¹⁷ この三大訓は、〈救いの構造〉における三つの概念のそれぞれに相当すると考えられるものであり、救済論的にも主要な三概念を網羅していることを確認してほしい。

私は、教会論、救済論、それぞれにおいて伝道の使命は不可欠な要素であると考える。教会が地上に存在している最大の理由のひとつが、まさに主から伝道を担う器として選ばれていることにあるからである¹³。また、私の〈救いの構造〉においても、「目的概念」にあるキリスト者の課題のひとつとして「主に忠実に従うわざ（働き）」が、救いの豊かさを味わう大切な要素として考えられている。ここでは、神に贖われ、召されたキリスト者が主の栄光のために生き、働くことが救いを達成するために必須の課題であり、それが、終わりの日につながり評価されるということが記述される¹⁴。

そうすると、教会についても、それを伝道の結実としてとらえるだけでなく、同時に、伝道の担い手として位置づけることが非常に大切なこととなる¹⁵。

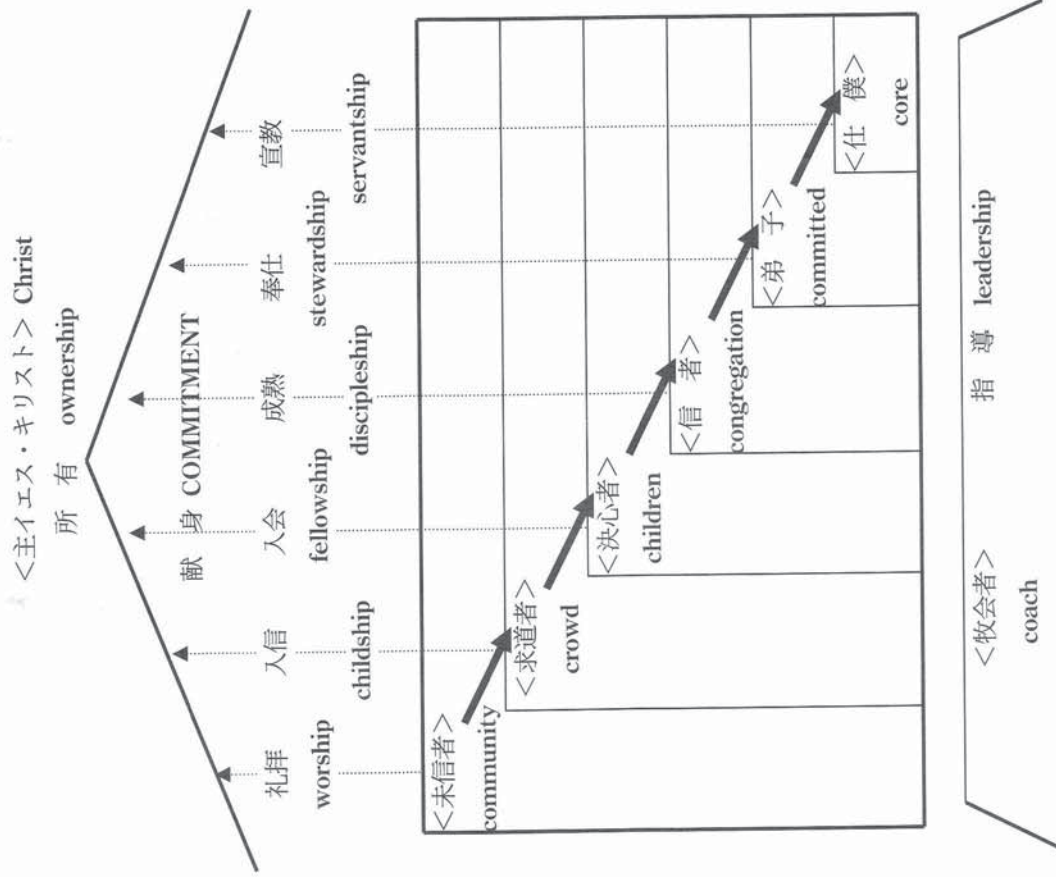
B. それはまた、現実の教会の式典、活動、プログラム、そして組織的運営がそれを実現していなければならないことをも意味する。この点において私は、リック・ウォレンの『The Purpose Driven Church』(Rick Warren, 拙訳編『健康

¹³ ヨハネ 15:16、1コリント 3:6-15、IIコリント 5:20-21、Iペテロ 2:9 など参照。

¹⁴ Iコリント 3:10-15、4:1-5、15:58 など参照。

¹⁵ このことは、バプテスマの意味からも考えられる。それには三重の意味があり、(i) まずそれは何よりも、自分自身にとつての葬式および誕生式である。十字架に死なれキリストとともに古い自己に死に、よみがえられたキリストのいのちに新しく生まれるということが現実起こったことの表明だからである (ローマ 6:1-11、IIコリント 5:17、ガラテヤ 2:20 など)。しかし、それだけではなく (ii) 神と教会に対する契約および入会式でもある。バプテスマ式での誓約には、神の(キリストの) 招きに応じて神とともに歩むことを誓う契約の意味があるとともに、教会に入会して同じ神の家族 (兄弟) の交わりの中にあつて生きること誓約する意味がある (ガラテヤ 3:15-29、Iコリント 12:13 など)。さらにもうひとつ、(iii) それは世に向かつての任命および派遣の意味がある。神に召されたということは、神の栄光を現し、キリストを証する「キリストの使節に任命された」ことを意味するからである。従来から、召命は救いは異なった特別なこととして語られる向が強いが、信徒全員がこの世に遇されるべく召命をうけ、バプテスマによって任命されたのである。そうならば、それは基本的な授手礼と言ってもよい (IIコリント 5:18-20、エペソ 4:1-13 など)。ところが、この側面がバプテスマにおいて語られることは少ないように思える。しかし実際には、バプテスマはキリストによる救済の三つの概念 (側面) をそのまま意味している豊かな礼典なのである。

<緑キリスト教会の対象別「使命（目的）への献身図」>



ここでの<使命（目的）宣言文>は、それら6つの使命（目的）を一文にし
たものであるが、それだけでは具体的にイメージしにくい。そこで、それら全

すなわち、神に生かされていることを承認する「入信」に深く関係する
課題である。

(2) 大いなる戒め (Great Commandment) “心を尽くし、思いを尽くし、
知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。”これがたいせつな第一
の戒めです。「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という第二
の戒めも、それと同じように大切です。”(マタイ 22:37-39)
これが「大いなる戒め」と呼ばれているのは、旧約のすべての戒め(律
法と預言者)を要約しているからである。そのようなこの教えは、神
から新しい(聖い)いのちを与えられたキリスト者が、神を愛し、人を
愛する人になるようにとの課題を語っている。それは、主をまことの神
として大切にし、愛する「礼拝」から、人々を愛して仕えていくように
なる「奉仕」の課題——二つのサービス——に触れている。

(3) 大いなる委託 (Great Commission) “あなたがたは行って、あらゆる
国の人々を弟子とみなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプ
テスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのこと
を守るように、彼らを教えなさい。”(マタイ 28:19-20)

召された神の民である教会に、主は世に向かっての使命 (Mission=宣
教の任務) を残された。そのもとも包括的な記述が一般的に大宣教命
令といわれている「大いなる委託」である。これは、主に従って生きる
ように召された教会が、世の人に向かってなすべき弟子化の働き(わざ)
三点を語ったものである。すなわち、遣わされて出て行く「宣教」、人々
をバプテスマによって教会の交わりに「入会」させること、そして、人々
をみことばとみ霊によって「成熟」へと育成していくことである。その
ようなわざへの献身を、個人に向けて語られたのが“だれでもわたしに
ついて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架(使命)を負い、
そしてわたしについて来なさい”(マタイ 16:24) であるということがで
きよう。

体を展望するパースペクティブを与え、ひとりの人が教会に来るところからキリスト者として成長していく標準的プロセスとして表現したものが<使命(目的)への献身図>である。

IV. 伝道のダイナミックなプロセス(諸目的)と教会

教会のなしている活動はすべて、その目的に仕えるものでなければならぬ。ところが前述したように、従来の組織神学の教会論においては、そのようなまともめ方がなされていないので、現実の教会の営みにおいてもろもろの活動が目につかなくなっているかどうか、点検していくのが現状である。ここで考えている教会の6つの目的がそれぞれ、ひとりの人の救いのプロセス(それは、主に対する献身の深まりの段階でもある)においてどのような役割をなしているか、ひとつずつ述べることとする。

(1) 礼拝(教会の場による神体験)

礼拝は教会の多くの営みのなかで、もっとも中心的なものである。なぜなら、神を信じていない世から集められた教会は、その第一の使命として、神を霊とまことによって礼拝することが求められているからである(出エジプト3:12、マルコ12:28-30、ヨハネ4:22-24)。しかし、礼拝を豊かに、意義深く、洗練したかたちで行おうとすると、それは反面、未信者や求道者にとっては「むずかしかったり」「疎外感をおぼえたり」する可能性がある。

礼拝こそが、生ける神の臨在と語り掛けを体験することのできる伝道の最高の場、最良の機会であることを考えるとき、聖餐式をも含めた礼拝式次第(プログラム)が、未信者にも魅力的なものとなるように企画することが大切であると考える。

(2) 入信(個人的決断)

福音主義に立つ私たちにとっては、これは伝道の核心部分である。幼児洗礼を行う教会であろうと、信仰によるバプテスマを主張する教会であろうと、日本の教会の場合は等しく自由教会であるゆえに、個人による「入信の決断」が重要視されている。そのような、ひとりの人の信仰告白はもちろんで、第一

義的に聖霊の働きであるが、教会にもなすべき務めがある。それは、祈ること、そして福音をはっきりと告げ知らせること、そして、キリストを受け入れるように説得することである。

特に、日本の文化に生きている人々には異教的思考が沁みついており、単なるキリスト教知識を開陳するだけでは、彼らを変ええる力がない。そのようななかで、まず個人的に、キリストをまことの神、唯一の救い主として人格的に信頼するように、そして主なる神にむかって「天のお父さま」と呼びかける祈りのリアリティを体験するように導く必要がある。また、聖書を、私たちが生かし、導いてくれる神のみことばとして読み始めるよう手ほどきしなければならぬ。

(3) 入会(教会の交わりへの加入・所属)

前述したように(注15)、バプテスマはキリストを信じたことによつて得た救いのしるしであるとともに、世に向かつて証しする使命への任命・派遣式でもある。しかし、何よりもこの段階での重要かつ固有な意味は、神の家族である教会への「入会」である。(ガラテヤ3:15-29、1コリント12:13など)。「キリストのからだ」である教会に結びつかないキリスト信仰は自己矛盾であるが、現代のような個人主義の跋扈する時代であっても、いや、そうであればあるほど、人は実際に自分の所属する場所を求めている。キリスト者となった者(信仰的には幼子)は、自分を愛してくれる群れがなければ生きることではできず、自分の居場所、交わりをそこに見出すことができなければ、健全な信仰の成長を見ることはむずかしい。ここに「入会」の大切さがある。

(4) 成熟(成長と聖化)

人間は生まれてから本格的な成長が始まるが、そのときの中心の場は家庭であり、両親やその他の多くの人から指導、育成を受ける。ちょうど同じように、ひとたびバプテスマを受けてキリスト者となり、教会の交わりに加わった者も、霊的・全人的に成長していく場と活動を必要としている。従来、そのことは「聖化」に特化されてきたのであるが、主との交わりの深化、献身的ライフスタイルの形成などを含んだ「成熟」という一般用語を使ってもよいのではなからうか。特に現代のように、多くの人の人的・肉体的未成熟が指

摘され、「パーソナリティ障害」などを抱えている人の増加が言われているとき、教会の育成の働きは、全人的(包括的)成長を視野に置かなければならないように感じる。私自身の教会の働きでは、その中心的関心をここに置いてきた。しかし、日本の教会を顧みるとき、人々を「入信」と「入会」に導く熱心さに比べて、ひとたび信仰を歩み始めたひとりひとりを成熟へと導く、育成、教育、援助の働きが弱いように感じられる¹⁸。

(5) 賜物による奉仕(ミニストリーへの参加)

キリスト者の成長は、ひとりひとりが人格的、全人的に成熟することのみではない。教会とそれに属するキリスト者には奉仕することが期待されている。新約聖書には、それぞれが賜物を用いて互いに仕え合い、隣人に仕えていくようにとの勧めが多い。そして、それは「キリストのからだ」なる教会を建て上げていくために必須なことである。エペソ 4:12-16 の「こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになつたのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、・・・」とのみことばが代表的である。

(6) 宣教(伝道のみならず多様な使命を帯びて、世に派遣)

それでも、キリスト者の成長プロセスは終わりではない。彼らは、教会に主から与えられた、世に向かつての宣教的使命を担う者になるのである。1ペテロ 2:9 が「あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」と語っているように、である。もちろん、これは教会の共同体的使命であるけれども、そのためにキリスト者ひとりひとりが、教会の多種多様な宣教的働きのどこかの部分を自分の十字架(使命)として受け取り、それをライフワークとして担っていくようになることが期待され

¹⁸ 学会での発表後、この原稿を校正している間に、ピーター・スキャゼロ『情緒的に健康な教会をめざして』(いのちのことば社、2009年)が出版された。そこで扱われている「情緒的成熟」は、まさに見過ごされてきた一面に焦点をあてたものである。

ている。

このような教会の諸目的のプロセスが、全体的なパースペクティブのもとに堅実に行われるとき、教会は、伝道の結実としての教会建設だけでなく、伝道の担い手としての働きを継続、発展させていくことができる。

V. 教会の使命(宣教)と神の国の完成

最後に、もう一度検討しておきたいことがある。これまではひとりの人を教えるに導き、それを達成させていく「伝道(Evangelism)」を中心として述べてきたが、教会の世に対する「使命・宣教(Mission)」は伝道だけではない。

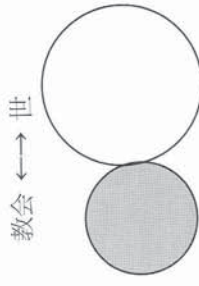
もともと、教済が創造の目的の完成であるならば、神に創造されて「非常によかった」(創世記 1:31)と言われた世界全体が、罪のゆえの毀損・歪みから回復されて、最後には神の支配(シヤローム)が確立するはずである。イエスがみわざを始められたときにも、開口一番に言われたことは「神の国は近くなった」(マルコ 1:15)であったし、弟子たちに教えた主の祈りでも「御国が来ますように」(マタイ 6:10)と祈るように教えられた。また、ヨハネの福音書では「神は、世を愛された」(ヨハネ 3:15)と記し、ローマ人への手紙 8:18-23 では、「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられぬ」と、宇宙的救済とも言える表現をしている。さらには、聖書の締めくくりとしての黙示録 21:1 以降では、新天新地に更新されるヴイジョンが描かれている。

教会の使命(Mission)への派遣が、父なる神による地上への御子派遣に起源を持ち、聖霊の派遣とともにあるのであれば、教会の宣教(Mission)が、単なる個人の救いにとどまるはずはなく、神の国をもたらす道具としての自覚を持つ必要がある¹⁹。

¹⁹ この点について述べている著書は多くあるが、「神の国を持つ聖書的リアリズム」について示唆を与える著書として以下を挙げよう。福音主義的新約聖書神学的研究としての『Jesus and the Kingdom—The Eschatology of Biblical Realism』George Eldon Ladd, S. P. C. K., 1966, アナバプテリストの視点からの J. H. ヨーダー著『イエス

代福音派においては、「宣教」は即「伝道」と同一視されてきた傾向があるなかで、「ローザンヌ誓約」以降、多くの者が「伝道」と「社会的責任」を同列に置くようになった。それは、教会の宣教（ミッション）は伝道よりも大きい概念であった、社会的責任をも含むものであるとの認識を表明しており、正しい。しかし、伝道と社会的責任が相互にどのような関係にあるのかについて議論しているのを、私は寡聞にして知らない。現に、福音派の中においても、並列的にただ並べられていることが多いように思われる²¹。

そこで、その思考の基盤を形成する“教会と世との関係”についての教会史における代表的類型を以下に素描してみる。

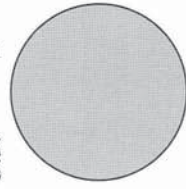


(1) 分離型二元論（世を拒否する教会）

カトリックの修道院の極端な例や
アーミッシュ、そして熱狂的終末論者
など。聖くあるうとして世俗を拒否し、
そこでの営みをできるだけ避ける。

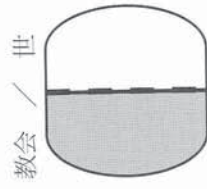
(2) 同化型一元論（世を支配・同化する教会）

カトリックなどのキリスト教国主義。
また、教会が世に同化するまで浸透する
ことを考える自由主義、社会主義。
当然、普遍救済論的となる。



(3) 共存型二元論（世と役割分担する教会）

ルターの二王国論。聖と俗、福音と律法、
霊の世界と肉の世界というように、



²¹ ポッシュの前掲書、257～263頁も参照。

A. では、教会と神の国との関係をどのように考えるべきであろうか。教会と神の国とが密接な関係にあることは明らかであるが、それらの間にはどのような関係があるのかは、必ずしも明白ではない。

聖書そのものはどう言っているのだろうか。イエスのマタイ 16:17-19 のことばから、教会と天の御国（神の国）は同義語であると言っている。(G.Vos) これにたいして、G・E・ラッド²⁰ は「それは、比喩をあまりにうがらずに「ベ」である」として、「むしろ、神の国は神の支配 (the reign of God) と考えられるべきであり、教会はそれに対して、神の領域 (the realm of God) ——神の支配の下にある民——と考えられるべきである」と言う。このような理解の仕方、ルカ 11:52、マタイ 21:33-44 とともに、明らかに教えられているといえよう。また彼は、神の国と教会の違いについて基本5箇条を述べている。

- (1) 教会は神の国そのものではない。
- (2) 神の国が教会を創造する。
- (3) 教会は神の国を証しする。
- (4) 教会は神の国の道具である。
- (5) 教会は神の国の管理者（保管者）である。

結局、教会は神の国の現れた一形態である（旧約のイスラエルも同様）。神の国は、人間が創造される以前から天に存在したのであり、神の絶対的支配を神の意志によって私たちのただ中に具体化する。新約においては、それが教会である。

B. もうひとつ、はっきりしておかなければならないのは、神の国の福音宣教に含まれる、伝道と社会的責任の関係、または教会と世との関係である。近

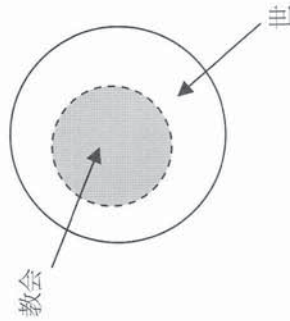
の政治・聖書的リアリズムと現代社会倫理』(新教出版社、1992年)と『社会を動かす礼拝共同体』(東京ミッション研究所、2002年)、そして、日本人によって初めて書かれた神の国についてのまとまった著作である『神の国とキリスト教』古屋安雄、教文館、2007年。

²⁰ 『A Theology of the New Testament』George Eldon Ladd, Eerdmans, 1974, Chapter 8 「The Kingdom and the Church」から。

神の権威とその働きがひとりの人
のなかで二分化される。信仰生活を
聖日（教会生活）と週日（世俗生活）
に分ける傾向。

(4) 派遣型一元論（世に証しし仕える教会）

教会も世もともにキリストのひとつの
権威の下にあり、その権威の及ばない
領域はない。また、神の働きは教会を
用いて世に向かうものであり、決して
分化されてはいない。初代教会が好例。



これがとりもなおさず、教会のこの世に対する使命の「伝道」と「社会的責
任」の位置づけに結びつく。「教会」のところに「伝道」、「世」のところに「社
会的責任」を置いてみるとよくわかるであろう。私は、(4)こそが「世」にあっ
て世に従わず、しかも世に仕えつつ福音を証しする教会」として聖書的であると
考える。ここでは伝道と社会的責任の並置が避けられ、伝道の中心性が維持さ
れている。同時に、伝道が「核」であり、社会的責任は「実」であって、それ
らは相互に不分離であることも表現している。

C. 緑教会の〈使命（目的）宣言文〉において、教会の6つの使命（目的）
の最後に位置づけられている「宣教」は、成長し、献身を深めたキリスト者た
ちが、教会の使命を担って世に派遣され、神の国完成のために働くことを指し
ている。ここでは、伝道に献身することが中心ではあるが、それだけではない。
公共社会にあって、それぞれがよき市民として生きるとともに、ひとりひとり
個別に与えられた召しと賜物に従って自分の使命（十字架）を見出し、それを
ライフワークとして献身的な生活をするこままでを射程に入れるのである。そ
れが、いわゆる「社会的責任」を果たし、「神の国完成」に向けての働きに献
身することである。とはいえ、現代の複雑・多様化し、変化の激しい高度産業

化社会にあっては、ひとりひとりの信徒が献身的な生活領域を見出し、それをラ
イフスタイルとして確立していくのは決して易しいことではない。であればな
おさら、教会の存在意義としての「宣教力」強化が問われているといえるであ
らう²²。

それは、最初に述べた「繁殖伝道」としての教会成長論が広まるにつれて、
徐々にその視野から消えていった「神の国」をもう一度、正しく取り戻す必要
があることを意味する。実際のところ、教会成長論の提唱者マクギャランは、
前掲書 288 頁において、伝道の結実としての社会正義の促進にまで触れていた
のである。

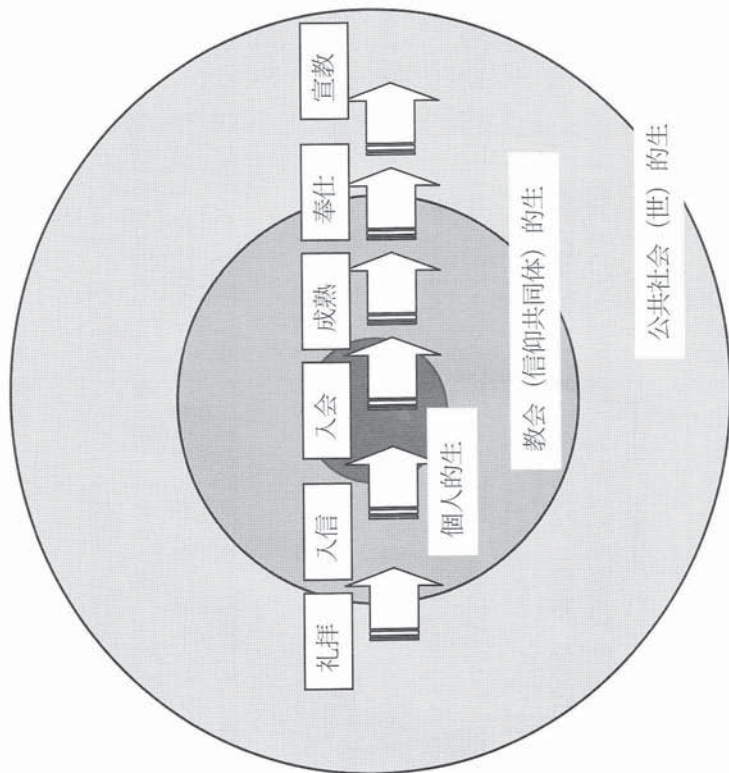
その反省を受け止めるとき、「献身のプロセス」は、そのような神の国完成に
向けて献身を深めるところまでを含まなければならないと考える。ここで
述べた6つの段階にまとめたプロセスは、それぞれが、ひとりの人の個人的
生の次元、信仰共同体的生の次元、公共社会（世）的生の次元のどれかと深い
関連を持っているのである。それはまた、キリスト者倫理において、個人倫理、
共同体倫理、社会倫理と整理して、それぞれの次元（領域）での生き方を身に
着けていく機会を備えることが期待されていることを意味する。換言すると、
神への献身、教会と自己への献身、そして世への献身がチャレンジされていく
プロセスである。

そこで、観点を変えて、ひとりの人に福音が届き、その人の生を貫いていく
様を考えて図示してみよう。下に示した〈ひとりの人における献身の深まりと
生の諸次元〉を参照されたい。（次頁）

すなわち、まだ真の神を知らない未信者は、「礼拝」において教会（礼拝共同
体）と関わるようになる。求道者となり、「入信」をチャレンジされるときには、
もっとも深いところで個人的な生き方の転換（回心・悔い改め＝180°の方向転

²² 16世紀以降、カルヴィニズムにおいて世俗内献身が語られたことは、聖職者のみ
の献身が考えられていた、それまでのカトリック教会に比べるときに画期的なこと
であった。しかし、その召し（beruf, calling）が職業に同一視されていくとき、全信
徒の献身生活ということが、高度産業化、複雑化していった近代社会のなかで徐々
に適用しにくくなってきただけに思われる。

換)が問われる。そして、ひとたびキリストを信じる決心者となつてから、あ
くひとりの人における献身の深まりと生の諸次元>



らためて誓約をもって (バプテスマを受けて) 教会に「入会」し、神の家族の一員として生きるよう招かれる。その教会は、神の民、キリストのからだなる信仰共同体として、キリスト者がキリストの身丈にまでともに「成熟」し、互いに自分の与えられている賜物をもって「奉仕」していくところの場 (家・学校) である。しかし、キリスト者の目的はそれで終わることはない。かつて世に属して生きていた者が神に属する者となったのは、世にむかって神の「宣教」の使命を担って派遣されるためであるから、世にあって自分の宣教的使命を見出し、それをライフワークとして生きる事が期待されているのである (私はそれを“360°の方向転換”と呼んでいる)。そのとき教会は、その働きに出て行く

人の前線基地となる。

教会が、特に神の国完成のための道具として、神からこの世に遣わされているのであれば、教会の諸使命 (目的) がそのように表明されるとともに、その存在と活動のなかでそれが実践されていかなければならない。しかし、現代日本の教会を考えると、果たしてその目的全体を意識しつつ活動しているか疑問が残る。主イエスが言われたことば、「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたの良いい行いを見て、……あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良いい行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい」(マタイ 5:13-16) が重い。

おわりに

近藤勝彦氏は前掲書のなかで、『伝道』の神学的考察は、実に神学の全領域に及んでおり、それぞれの分野での成果が期待されているわけである。しかしここでの問題はとりわけ組織神学である。特に教義学において『伝道』は、世界的に言って、ほとんど忘却されてきた神学的主題の一つであると言わなければならないであろう」(4頁)と述べている。福音主義教会にあっても事情は似ていると感じる。そして、そのことが「伝道」を何よりも実践神学分野のこととして、方法論に終始させる傾向を惹起するとともに、多くの牧師たちをして、「クルセード伝道」、「教会成長」、「弟子訓練」、「セルグループ」などの流行に走らせることにもなってきたひとつの要因ではなからうか。

「伝道の神学」が必要なゆえんがそこにあり、今回の研究会議がそれを取り上げた意義もそこにある。本稿では、その主題が問うている「伝道論」と「教会論」の関連について考察し、私見を述べた。今後の活発な議論のきっかけになれば幸いである。

(日本バプテスタ教会連合緑キリスト教会牧師、
東海聖書神学塾塾長)

応答Ⅳ 河野勇一「伝道の結実：教会建設」への応答

ヴィジオ・デイからミッシオ・デイへ —伝道共同体と礼拝共同体の統合を目指して—

工藤弘雄

「現代日本における伝道の神学」を主題に「伝えるメッセージ」、「多元主義社会における伝道」、「伝道の担い手」について共に研鑽の時をもつことができた。講演Ⅳにおいては「伝道の結実—教会建設—」について河野勇一氏により極めて明晰な発題がされた。「農業を類比した伝道観」、「救いの構造（スキーマ）」、「使命（目的）への献身図」、「教会と世との関係を示す代表的類型」、「献身の深まりと生の諸次元」などいくつかの図表化された表現はわれわれの理解を十分に深めさせてくれた。特に「伝道の結実としての教会建設」から「伝道への装備としての教会建設」の視点は「伝道共同体としての教会」と「礼拝共同体としての教会」の統合と深い関わりをもつ。本応答論文においては、その関わりの中で「共同礼拝の形成」を「ヴィジオ・デイからミッシオ・デイへ」の視点で考察したい。

1. 共同礼拝における伝道の結実と伝道への装備

伝道とは教会拡張主義や改宗者獲得主義、またキリスト教的帝国主義でもない。「エバンジェリズムの建設的理解に向かって」のボッシュの伝道の概念は、教会の働き全体の本質的要素としての伝道、過去、現在、未来における神の行為の証言としての伝道、神の行為に対する人間の応答、転換を目指す伝道、永

遠の喜びへの招きとしての伝道、エクレシヤ共同体の生活に根ざす伝道、説教と社会正義の実践が伴う伝道などが掲げられている¹。その総括としてポッシュは伝道を次のように定義している。

伝道とは、「ある特定の条件の個々の状況におけることばと行いによって、どんな所においても、すべての人およびすべての共同体に、その根本的な方向転換への直接的な確かな機会を提供するものである」²。そしてポッシュは、その方向転換を5つの段階で示している。第1に、奴隷がこの世とその力から解放されること、第2に、キリストを救い主、主として受け入れること、第3に、キリストの共同体、すなわち教会の会員となること、第4に、和解と平和および地上における正義のための働きに加わること、そして第5に、キリストの支配の下にすべてのものを置く神の目的に自らを献げることの5つである³。

これらの伝道の概念が教会形成においていかに機能するか。この伝道概念が基盤となり、河野氏の「伝道の結実としての教会建設」は組み立てられているように思われる。その「教会建設」は「伝道の結実としての教会建設」と「伝道への装備としての教会建設」の統合を指向するものであった。

まず、河野氏は、20世紀の福音主義のサークルにおいて考えられ、実践されてきた「伝道(宣教)」観を農業の類比において分類した。耕地伝道、種時伝道、結実伝道、収穫伝道、そして繁殖伝道の5類型である。これらの類型は、確かに一つ一つが独立した伝道類型ではある。河野氏はこれらの5つの伝道観の中で「繁殖伝道」を最良としている。それは、「伝道」が教会に結実すると共に、教会建設、教会活動そのものが伝道の一環をなしているということを理由にあげている。

しかし、農業への類比からすれば、これらの類比は、確かに第5の類型の「繁殖伝道」が最後であり、最良であると言えるが、その前の4つの伝道観は「繁殖伝道」への一連のプロセスとも見ることができると言える。これらの類型をトータルに受けとめる時、教会のわがざたる伝道の視野はより弾力性をもち、ダイナミッ

1 デイヴィッド・ポッシュ『宣教へのパラダイム転換』(東京ミッシェン研究所、2007年)412~420頁

2 前掲書、420~421頁

3 前掲書、420~421頁

クなものとなると思われる。

それと共に、確かにこれらの伝道観には固有の概念と目的があることも否めない。たとえば、耕地伝道にしても「直接伝道」への大地を耕す「間接伝道」という目的だけでなく、教育、福祉、社会正義などは、「第一義的にはそれ自体が遂行すべき価値をもつものである」⁴。確かに、教育、福祉、社会正義がどれだけ伝道の土壌を耕すものであるかは測り知れない。しかしそれらはまた、「神と人」との和解という垂直的な伝道の結果としての水平的な隣人愛の実践と見ることができよう。

「宣教と教会の関係」における4つの類型化、一教会の付属物としての宣教、教会の本質としての宣教、教会の中心としての宣教、教会を越え世を軸とした宣教⁵においても論理上、明確な色分けは可能であり、その要素、傾向性は否めない。しかし、現実の伝道、牧会の視点からすれば、これらの4類型は混在して教会の中に実在する。牧会者と教会員との視点の相違、教会を構成するメンバーの相互の認識の相違など、一色に塗りつぶせない、動的で複合的なキリストの体の実在を認めざるを得ない。

伝道の目的である救いについての概念を河野氏は「神と人」との関係における垂直的な次元においてとらえている。「垂直的次元を失ったキリスト教は塩気を失ったものである」とポッシュも言っているが⁶、包括的な救いの核は魂の救いをおいてほかにない。伝道とはひとりの人を救い主なるキリストに結び合わせることに伴って神と和解させ、キリストの体なる教会に召集させ、かしらなるキリストに達するまでに成長させ、キリストの和解の使者としてこの世に派遣させることである。

河野論文における「救いの構造(スキーマ)」はひとりの人の救いの構造を時間的にも概念的にもとらえたものである。救いの成就とは神の国の成就と同様、「既に(already)」と「未だ(not yet)」の緊張を持つ現実である。その救いの完成は現在完了的な救いと終末的な救いの間に直接法の「であるから、こ

4 近藤勝彦『伝道の神学』(教文館、2007年)279頁

5 西岡義行「プロテスタントにおける宣教と教会の相互関係」『福音主義神学』第38号(日本福音主義神学会、2007年)6~10頁

6 ポッシュ、前掲書、264頁

うしなさい」(imperative in indicative) という恵みに基づく命令によって救いの完成に向かって成就していく。

オールド・サリュティイスの概念はプロテスタント神学諸観点からすれば、基本的にはルターにおいては神の義の転嫁(imputation)に基づく義認論の視点からキリスト者の全生涯にわたる救いがとらえられ、カルヴァンにおいては義認と共に新生、聖化におけるキリストの義の分与(impartation)を強調し、キリスト者の全生涯における悔い改めを深化させた。ウェスレーにおいては、救いの全過程に聖霊の働きを認め、回心以前の認罪、悔い改めという先行恩寵、初時的聖化ともいわれる新生、そして漸進性と瞬間性を相備えた全的聖化への救いをオールド・サリュティイスの基本線とした。これらのオールド・サリュティイスを一直線上に並べ、その図式化された救いを体験させる危険性を歴史の中で見せられてきたし、教派神学間における救済観論争に拍車をかけてきたことも否めない。

河野論文においては、オールド・サリュティイスにおける時間的、直線的配置以外の理解の可能性を時間的次元と概念的次元を総合的に整理している。救いの全体的像を「回復した神の像」とし、概念的次元としては、関係概念、実体概念、目的概念の3つの概念に、時間的次元では所与、課題、約束の3つの次元に分類している。この救いの構造が「伝道」の結実と、「伝道」のための準備の場としての教会の中でいかに機能していくか。ここに伝道の結実としての教会建設と伝道への準備としての教会建設の統合を見ることができた。

「伝道」の結実としての教会と「伝道」のための準備としての教会形成が具体的にいかになされるか。教会形成の取り組みの中で教会活動として伝道、教育、福祉、社会正義などの実践が行われてきた。具体的には、救霊伝道の領域において各個教会における定期的及び様々な形態をもった伝道集会や地区家庭集会、教会学校などの取り組みがなされてきた。これに超教派的なクルセード方式の大衆伝道、さらには伝道精神と伝道技術を身につけさせるための伝道セミナー、弟子訓練、セルグループなどの取り組みがなされてきた。

一方、「伝道」の結実がより豊かで確実なものとなるための取り組みとして、教会内においては定期的な聖書の学び会や、祈禱会、教会内外での修養会、アシュラム、聖会などが行われてきた。プロテスタント教会の歴史の中でもピュ

ーリタン運動における牧会者的家長をリーダーとする厳格なクリスチャン・ホームの形成、敬虔主義運動における「敬虔者の集い」、メソジスト運動における「組会組織」、聖化と成熟を求めての集いとしては米国のキャンピング・ミーティング、英国のゲズイック聖会運動、日本においても修養会、聖会の各運動など牧会にいとまがない。

これらの「伝道」の結実、成熟を求めての取り組みの多くは「伝道」への裝備、いわゆる、世に派遣されていく「献身者」の使命と目的をもったものでもあった。たとえば、英国のゲズイック聖会では、1875年の創始から今日まで貫しての聖会の主題とその進行プログラムは「キリスト者の罪」、「罪の解決」、「聖霊の満たし」、「献身」であった。しかし、こうした「伝道」の結実と「伝道」への裝備の取り組みは教会活動の中心である「公同礼拝」以外のところで行われてきた。その結果それらは教会全体に浸透せず、ややもすれば、一部のエリート的な信徒を作ることと終わってしまう傾向があった。それゆえ、今日、「公同礼拝」において「伝道の結実」と「伝道への準備」がどのようになされて行くかの考察が迫られているのではなからうか。

II. ヴィジオ・デイに向う公同礼拝

「神の像の回復」と「神の国の完成」を目指して、「既に」と「未だ」の間時に存在する地上における戦闘の教会は、「伝道共同体としての教会」と「礼拝共同体としての教会」の二面性をもつ。教会が教会である限りキリスト者は言葉とわざにおける福音の使者、キリストの和解の使者として、「地の塩、世の光」としてこの世に派遣される。それと共に今の「悪の世、悪の時代」というサタンが支配するアイオーンから救い出され、神の民として召集され、礼拝の民とされて神に近づく。「世に派遣される」という「伝道共同体としての教会」と「神に近づく」という「礼拝共同体としての教会」の統合の公けの場が「主日礼拝」であると言える。それは、コインの表裏のように一つのものの二面であって、二つの異なる面ではない。たとえば、「神に近づく」という「礼拝共同体」は同時にそれそのものの中に「伝道共同体」の要素を含んでいる。また「世に派遣される」という「伝道共同体」こそが「礼拝共同体」の真の姿

であるとも言える。

礼拝におけるヴィジオ・デイとミッシオ・デイの視点からすれば、礼拝の到達点はヴィジオ・デイにはかならない。由木康は公同礼拝を「聖書に示される神と神の民である教会が公に全体に会見すること」と言っている⁷。その会見の内容は、神が教会に聖臨在をあらわし、み言葉を語り、育成されることであり、教会が神に栄光を帰し、一体となって拝み、この世に代わって神に祈ることであるとしている。礼拝の本質は「民を神に会わせるために、宿営から導き出す」（出エジプト 19:17）ことにほかならない。キリスト教礼拝の本質とは何かを表現するとすれば、「礼拝とは神のことばによってなされる神のみわざに基づく、神と神の民との動的な会合、交わりである」と言える。

徳善義和氏は礼拝を「神のことばによってなされる、人間に対する神の奉仕」と定義している⁸。一見、そこには人間の神への奉仕は言及されていない。しかし、当然、神の奉仕に「神の奉仕」が含まれていることは論をまたない。その神への奉仕さえも神の奉仕によって引き起こされる人間の神への奉仕、恵みのわざであると理解できよう。

礼拝はこのようにすべて神のわざであることを前提としつつも、われわれプロテスタント教会の公的礼拝には、2つの部分ないしは2つの要素があることは共通の認識となっている。これを「啓示」の部分と「応答」の部分、あるいは「パルテ・デイ (parte Dei)」と「パルテ・エクレジエイ (parte ecclesiae)」が民に臨まれる部分と民が神の恵みに応答する部分とも言い得る。

「神の言葉によってなされる神のわざ」であるパルテ・デイでは、聖書朗読、説教、聖礼典（サクラメント）という「神の言葉」の3つの様式をもって神は神の民に臨まれる。礼拝におけるこの3つの様式をもった「神の言葉」が聖霊によって正しく伝達される時、そこに必ず神の民の応答、すなわち、祈禱、讃美、献金、信仰告白などが呼び起こされる。これこそが聖書が啓示された神とその神の民との動的な会合、交わりと言えらるであろう。したがって、第1の

パルテ・デイ、神が民に臨まれる神のみわざを中絶して、讚美や祈禱と言った人間の側の応答を過度にエモーショナルに引き出そうと求めることは危険性を伴う。

「神の言葉」の第1の様式である「聖書朗読」は初代教会の礼拝においては旧約、新約の両方の聖書からきわめて多くなされてきた。しかし、4世紀の末までには旧約聖書から1箇所、新約聖書から2箇所の3つに減少した⁹。旧約時代、エズラと彼を輔佐する13名の者が「神の言葉」を夜明けから真昼まで朗読した時、民は立って、アーメン、アーメンと応答した。公同礼拝における「聖書朗読」において、神はご自身を開示し、ご自身のみわざをなされる。「聖書朗読」において礼拝者は直接に神の語りかけを聞き、ヴィジオ・デイへと向かわせられる。

パルテ・デイにおける「神の言葉」の第2の様式である「説教」においても聖霊は働かれ礼拝者をヴィジオ・デイに向かわせられる。ウィングレンは「神はその人類救済活動を通し、今日に至るも、これを継続させておられる。その方法が説教である。説教によりて神がサタンとの戦いにおいて決定的勝利を得たもうことを全世界の人類に宣べ伝えておられるのであって、この宣教がなければ人は皆、失望、絶望のうちに滅びるものである。こんなわけで世界で説教ほどの大事業は他にないものである」と断言している¹⁰。

レイモンド・アバは、説教に関するプロテスタントの古典概念は、カトリック教会のミサ観と類似し、真実な説教においては、真実の礼典におけると同様に言葉以上のことがなされると述べている¹¹。そして、本質的に説教はキリストにおける神の救いのわざを媒介する秘儀的行為であって、両者ともキリスト

⁹ レイモンド・アバ『礼拝—その本質と実際』（日本基督教団出版局、1966年）64頁

¹⁰ 長谷川計太郎『厳かな人生の事業』（長谷川計太郎遺稿集刊行会、1975年）101頁。なお、Gustaf Wingren『The Living Word—A Theological Study of Preaching and the Church—については加藤常昭『説教—牧師と信徒のために—』（日本基督教団出版部、1967年）189頁を参照。

¹¹ アバ、前掲書、80～81頁

の「真の臨在」を媒介することにかかわっているという¹²。

「人類救済活動の継続としての説教」、「神の救いのわざを媒介する秘儀的行為としての説教」には必ず「3つの聖なるもの」が伴うと言える。「神のみ顔」と「神のみ声」と「神のみ手」である。この真の臨在を媒介する説教にこそ真の説教のリアリティーがあると言える。そして、この説教のリアリティーは礼拝者をしてヴィジオ・デイに向かわせると言えよう。

礼拝における「神の言葉」の第3の様式である「聖礼典」において「神の言葉」は「見えるかたち」において表現される。キリストの裂かれたからだだと流された血という過去になされた救いのみわざを記念し、想起して行われるこの礼典を通して礼拝者は神に近づき、キリストと一つとされる。アナムネーシスは神の救いのわざの記念でもあり、想起でもあると言える。それは過去の出来事が今、ここでなされているという神のみわざの現実化、同時化と受けとめ得る。そうであれば「説教」におけると同様に「見える神の言葉」も秘儀的行為であり、人類救済活動の継続と言える。礼拝者はこの「見える神の言葉」を媒介としてヴィジオ・デイのリアリティーを体験する。このサクラメントのリアリティーは、説教のリアリティーと本質を同じくするものであり、礼典におけるキリストの十字架と復活の「想起」は使徒パウロがキリストの死と葬り、復活と顕現の事実に基づいて「以前あなたがたに伝えた福音」、「最も大事なこととして伝えた福音」（1コリント 15:1-3）つまり「語られた神の言葉」に結びつけられるであろう。

こうした「神の言葉によってもたらされた神のわざ」は前述のように当然のことながら信仰告白、讃美、祈禱、献金と言った神の民の応答を呼び起こす。そして、そこに神と神の民とのダイナミックな会合がなされ、礼拝者をしてヴィジオ・デイにまで近づけるであろう。

礼拝とは神に最高の価値を帰することである。神を神として拝することである。だから、公同礼拝は「伝道」の場でありつつもそれが最終目的ではない。「交わり」の場でありつつもそれも最終目的ではない。人間の修養、聖書研究、奉仕の要素をもちつつもそれらが最終目的ではない。礼拝はそれ自体が目的で

あって、もしそれらのものが最終目的となる時、キリスト教会はその存在意義を失うであろう。

「礼拝は祈禱よりも深遠なることであります。神を礼拝することは神と交わることよりも深いことです。天の使いの拝することを御覧なさい。神の宝座の前に俯伏して冠を投捨てて神を拝します。これは真正の礼拝です。自己を捨てて神の大なることを感じまして神を讃美することは真正に神を拝することです。真正の礼拝は神はすべてなること、人間は無きがごとき者なることを感じまして神を拝することです」とバックストンは講じている¹³。主イエスはサマリヤの女性をこの深遠な礼拝に導かれた。「私共は心中に十四節の泉をもつておりますならば二十三節の真正の礼拝をすることができはるはずです¹⁴。実に伝道の目的は人をして真の礼拝者とさせ、ヴィジオ・デイにまで導くことであると言える。

III. 救いが働く道としての公同礼拝

公同礼拝の啓示と応答の全ては、聖霊の働きによって導かれる。聖霊はパルテ・デイとパルテ・エクレジエを導き、礼拝者をしてヴィジオ・デイにまで向かわせられる。礼拝の到達点はヴィジオ・デイにはかならない。旧約時代における幕屋および神殿の構造が外庭・聖所・至聖所へと神への近づきの深化を表しているように、新契約における公同礼拝もついににははばかることなく至聖所へ導き入れられ、神にまみえるのである。（ヘブル 10:19以下）であるから、公同礼拝はすべての礼拝者にとって「救いの入り口」であると共に「救いのゴール」であるとも言える。むろん、この「救い」は神の民にとつては「神の国の完成」を意味し、一人一人の礼拝者にとつては「神の像の回復」と言える。「救いのゴール」と言ったがそれは終末に向かつての「中間時」におけるものであって「完全の不完全」、「到達の未到達」を意味する到達点にほかならな

¹³ B・F・バックストン『ヨハネ伝講義』（バックストン記念霊交会、1899年）74頁

¹⁴ 前掲書、75頁

い。公同の礼拝における「啓示」と「応答」の礼拝行為の中で、聖霊は伝道共同体である神の民をヴィジオ・デイに向わせ、「神の国の完成」へと近づけ、神の民として召集されている一人一人をヴィジオ・デイに向わせ、「神の像の回復」へと導かれる。認罪、悔い改め、救いの信仰、義認、新生の喜び、さらにキリスト者に残存する罪の認識、聖化、成熟への渴望、贖罪の血の効力、内在する罪の解決、聖霊の満たし、キリストの像への内的形成など聖霊は公同礼拝の営みの中で個々の礼拝者に働きかけられる。

「伝道共同体」のわざが、「礼拝共同体」の中でどのように行われ、礼拝の到達点であるヴィジオ・デイにまで至らせるか。特に「伝道共同体」として礼拝のいとなみの中で聖霊の働きによる「入信」、「回心」と言った「伝道の結実」を求めつつ「礼拝共同体」が形成されて行くために、どのような取り組みが求められるであろうか。竹森満佐一はスイスの礼拝学者アルマン（J.Jvon Allmen）を引用して「礼拝がなぜ必要なのか」に答えている¹⁵。第1に、キリストがこれをお立てになったからである。第2に、聖霊のわざだからである。第3に、救いが働くひとつの道だからである。第4に、神の国がまだきいていないからである。

「伝道共同体と礼拝共同体の統合としての教会」の視点から見ると、叙上の4つに相互関係を認めつつも、特に第3の「救いが働くひとつの道」に注目したい。むしろこの「救い」は構造的には全体像をもち、礼拝が「救いの入口」ともなり「救いの到達点」に向かうことについてはすでに言及したが、「入信」や「回心」を内容とする「救いの入口」へのひとつの道としての礼拝の必要性が現代日本における伝道において見過ごしてきえない状況になっている。「伝道なき礼拝は実現した神の国を先取りした一種の熱狂主義と言わなければならぬであろう」と近藤勝彦氏も指摘する¹⁶。今日、この「救いが働くひとつの道」としての礼拝の必要性の視点から、礼拝を真剣に問い、見直す努力が求められている。「聖書朗読」の位置づけ、朗読箇所、教会における公用聖書の選択、説教における用語（キリスト者用語）の吟味、説教時間、伝道礼拝や家族礼拝、

¹⁵ 竹森満佐一「主題講演」『シンポジウム・礼拝論』（東京神学大学出版委員会、1981年）11頁

¹⁶ 近藤、前掲書、277頁

Invitation Service の取り組み、聖餐式の頻度、陪餐者と未受洗者の区別、詩篇歌、讃美歌、聖歌の選定、讃美グループやワーシップソングの導入の有無、種々の楽器の使用の有無、成文祈祷、自由祈祷、牧会祈祷のあり方など、礼拝の諸要素に関する具体的な取り組み課題が山積する。公同礼拝におけるリタジーの形成と共にパワーポイントなどによる説教要旨や讃美歌の掲示、インフォーマルな礼拝の導入、異教社会の中での追悼礼拝や幼児祝福礼拝のあり方などの課題もある。公同礼拝の時間帯、場所、長さ、回数、回数も異なる。ヴィジオ・デイに向かつて「神の民の礼拝」を指向しつつも、新来会者や求道者と言った神の民の予備軍である礼拝者を常に考慮し、配慮しつつ、どのように礼拝の取り組みがされるべきか。

この種の課題に取り組む時、聖書と過去の歴史のいとなみの中から自然の光とキリスト教的分別をもって正当で可能な判断が求められる。その場合、牧師の独りよがりの判断によらず、時間をかけ伝道共同体と礼拝共同体である神の民全体が一緒になって、祈りつつ、考えつつ、そして礼拝しつつふさわしい礼拝様式を整えていかなければならない。その際、日本のしかも 今日という文化と社会をも十分に考慮しつつ、伝道共同体と礼拝共同体の統合を指向する努力が求められるであろう。

IV. ミッシオ・デイに向う公同礼拝

公同礼拝の到達点はヴィジオ・デイと言える。それと同時にそのヴィジオ・デイはミッシオ・デイに連結する。徳善義和氏は次のように語っている。「神の奉仕としての礼拝は、み言葉にあずかる者を派遣する。その派遣はみ言葉による神の奉仕に参加することである。しかし、同時にその派遣はわれわれによる隣人奉仕(Nachstandienst)を含む。ミサ(Missa)に集められる者がミッシオ(missio)に送り出されていく。礼拝というのは、コンテクスタチュアル(脈絡的)に言うならば、そのような意味合いを持っていると思います。キリスト者の生活全体がそのように『集められること』と『派遣されること』とのダイナミックな神のアクションに置かれていることが礼拝であり、そのような節目に礼

ダースゲイト街における「心の暖まる」体験後、彼の中に急速に聖化のわざが進行する。たとえば1739年1月1日の日記では、「……フエタ横町における愛餐式に出席した。午前三時頃、祈り続けていたとき、神の力がわたしたちの上に烈しく降ったため、多数のものは喜びあふれて叫び出し、ついに床に倒れる者も出るに至った。神の臨在によるみいつと驚きとでやや正気づいたわたしたちは『われら、汝を讚美し奉る。おお神よ、われら、汝を主とみとめ奉る』と異口同音に叫びだした」¹⁹と記されている。このヴィジオ・デイの礼拝後、1739年4月4日、ウエスレーはホイットフィールドの招きでプリストルに來た。聴衆は約三千。この日はジョン・ウエスレーの最初の野外説教の日であり、メソジストのリバイバルの発火点となった日とも言える。

ヴィジオ・デイからミッシオ・デイへ。この場合のミッシオ・デイは三位一体の神ご自身が「わたしは下って」（出エジプト 3:8）と言われたように宣教の野に「下られる」と共に、「あなたをパロにつかわして」、「わたしは必ずあなたと共にいる」（出エジプト 3:10,12）、「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」（イザヤ 1:8）と言う神の民と共に、神の民を通して働くミッシオ・デイなのである。

神の言葉と神のみわざの伴わない公同礼拝はない。公同礼拝において、悪の世（アイオーン）から救出され、神の民として召集された神の民に「神の国の完成」に向って神のわざがなされる。また、礼拝者の一人一人に「神の像の回復」に向うと同様に神のわざがなされる。その礼拝の頂点は神ご自身の顕現であり、ヴィジオ・デイなのである。

礼拝の主体は神ご自身であり、神ご自身が神ご自身として崇められる。神の民の中になされる「神の国の完成」と「神の像の回復」のわざのためにはのみ礼拝は存在しない。礼拝の最終目的はヴィジオ・デイにはかならない。そして、そのヴィジオ・デイは必ずミッシオ・デイへと向わせる。公同礼拝においてミッシオ・デイの現実とは言うまでもなく「顕栄」に続く「祝祷」にほかならない。三位一体の神の祝福が「常に」「すべてのところにおいて」伴うということとはミッシオ・デイの現実以外の何ものも意味しない。それは、神の民の派遣

¹⁹ 『標準ウエスレー日記』山口徳夫訳（インスマスエル総合伝道団、1984年）28頁

拝はあると考えます」¹⁷。

聖書において「神を見る」というヴィジオ・デイがそのまま「神による宣教」というミッシオ・デイに直結する事例は枚挙にいとまがない。

出エジプト記3章におけるモーセの「燃える柴」の体験においても、イザヤ6章におけるイザヤの召命と派遣の体験においてもヴィジオ・デイとミッシオ・デイはそのまま直結している。モーセがくつつを脱ぎ、恐れをもって神を礼拝する。神はご自身の重荷を分与し、パロのもとに派遣する。イザヤは神の栄光を見、「わざわざいなる我」を見、祭壇の炭火により悪は除かれ、罪はきよめられる。その時、三位一体の神のみ思いを知らされ、神の派遣に応答する。

使徒パウロもダマスコ途上において復活、栄光の主の顕現に接する。そしてそのヴィジオ・デイはそのまま、「あなたを救い出し、あらためて彼らにつかわす」（使徒 26:17）とのミッシオ・デイに直結する。

栄光の主の顕現と神の宣教の直結は変貌山における「山頂の栄光から山麓の悲惨」へ向かう主イエスのみ姿においても見られる。ルカ9章29節の「輝くみ顔」は、9章51節の「エルサレムに行こうと決意して、そのまま顔を向けられる」という「恐れなきみ顔」と直結する。「エルサレムで遂げようとす最後のこと」（ルカ 9:31）にあらわされている人類救済事業に主イエスは立ち向かわれ、ルカはただひたすらにエルサレムに向かう途上の主イエスの足跡をたどる。（ルカ 13:22、17:11、18:31、19:28）。そしてついにエルサレムが見えた時、主は号泣された（ルカ 19:41）。

宗教改革期や近世の宣教の歴史を見てもヴィジオ・デイとミッシオ・デイの直結を見る。カトリック教会の対抗改革の中でプロテスタント教会に先だって世界宣教に着手したイグナティウス・ロヨラから「霊操」の指導を受けたフランシスコ・ザビエルは「霊操」によるキリスト体験（ヴィジオ・デイ）によって養われ、宣教にあたるべく、回心者や宣教師が深い霊性を身につけるべきことを理解していた¹⁸。

メソジスト運動のジョン・ウエスレーにおいても、1738年5月24日のアル

¹⁷ 徳善、前掲書、124頁

¹⁸ ピーター・ミルワード『ザビエルの見た日本』松本たま訳、（講談社学術文庫、1998年）33,39、109,110頁

を意味すると共に、三位一体の神ご自身の派遣（ミッション）でもある。

伝道の結実と伝道への装備としての教会形成は何よりもまず、「公同礼拝の形成」においてとらえなければならぬ。その公同礼拝の中で伝道共同体と礼拝共同体は統合され、一体となってヴィジオ・デイに向かって礼拝のいとなみを進める。そしてヴィジオ・デイという秘儀的出来事は必ずや礼拝者をしてミッシオ・デイに向わせる。

栄光の天の御国は地獄を貫いて存在する。そしてその魂がより高く天の高きに引き上げられた人こそ、より深く地獄の底にまで下って行く。ヴィジオ・デイに至らないミッシオ・デイはなく、ミッシオ・デイに向わせないヴィジオ・デイもない。今日の日本伝道における急務は真の礼拝の確立にある。それは伝道共同体と礼拝共同体の統合された礼拝であり、ヴィジオ・デイからミッシオ・デイに向かわせる礼拝であると考えらる。

(関西聖書神学校校長、

日本イエス・キリスト教団香登教会牧師)

再応答Ⅳ 工藤弘雄氏の応答に対する再応答

求道者に配慮する礼拝の説教

河野勇一

工藤氏は応答において、教会の公同礼拝がヴィジオ・デイからミッシオ・デイとなることの重要性とその機序について、神学的かつ実践的に深めてくださった。そして、そのためのバルテ・デイとして神の言葉の3つの様式、すなわち、聖書朗読、説教、聖礼典をあげられた。

私が示したく緑教会の対象別献身図>での「礼拝の位置づけ」は、それを伝道の最前線としている点で特徴的であった。すなわち、毎週の礼拝に未信者が継続的に出席・求道し、信仰に至ることを期待して、求道者に魅力的な礼拝を企画することが大切と考えている。そのために、神の言葉の3つの様式のうち最も重要かつ効果的なのは、説教であろう。そのとき、バルテ・エクレジエイとしての讚美音楽の種類が話題に上りやすいが、それは、説教に比べれば二次的であるというのが私の見解である。

この再応答では求道者に配慮する礼拝での説教をいかに行うかに集中して、具体的に述べることにする。

1. 未信者の地平に融合する説教をする

聖書は旧新約ともに神の民に向かって書かれたものであり、いわゆる異邦人や異教徒に向かって書かれたものではない。このことが、求道者（未信者）を配慮しつつ聖書の講解説教を試みる説教者に大きな課題をもたらす。それは、聖書の神をまだ信じてはおらず、また、ほとんどの場合、その信仰を必要とすら感じていない人々の生活文脈—文化、思想、用語、ライフスタイルなどが、異邦人や異教徒と同様、神の民のそれと大きく異なっているからである。

ところが、礼拝において聖書に忠実な講解説教をしようとするとき、説教者は通常、できるだけ先入見を排して聖書の文脈を理解し、歴史的・文法的意義

を正確に施すことにエネルギーを注ぐ。そのあとで説教者は、そこで得た普遍的メッセージを現代の会衆の文脈に適用して語ることで、その文脈の違いを乗り越えることができると考えられやすい。解釈・釈義の段階において、現代に生きている会衆や説教者の生活文脈を根本的に重要な要素とは考えていないのである。しかし、それでは、なかなかその大きな隔たりを乗り越えることができないというのが私の実感である。むしろ、未信者の生活文脈(先入見)を意識しつつの聖書解釈(黙想)が必要と考える。その場合、ガダマーがそのような読者側の先入見を大切にしつつ、作品を読み、解釈する方法として「地平の融合」を提唱したことが参考になる¹⁾。

例として旧約の一場面を考えてみよう。十戒の冒頭において「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があつてはならない。」と語られている(出エジプト 20:3~6)。すると説教者は「人は、主なるまことの神以外のもの、いわゆる偶像の神々を神としてはならない」と説教し、それに続いて、イスラエルの民に繰り返して語られた、偶像に走ったときに神から下される厳しい裁きの警告をも語ってしまう。キリスト者に語る説教であればそれほどでもない。なぜなら、十戒は出エジプトを通して主なる神こそがまことの神であり、救いの神であることを経験したイスラエルの民に語られたものだから、それと同じ救いをキリストによって経験したキリスト者にあてはまるからである。ところが、求道者はまだその神の救いを経験していないし、多くの者は偶像礼拝の生活をしている。彼らが上述の説教を聞くとき、「神は排他的で厳しい。裁く神で恐ろしい」と感じて不思議ではない。文脈化した説教として、そのように語ることでよいのだろうか。

十戒が語られた時代、イスラエルの民の周辺を考えてみれば、いわゆる偶像を神として祭り、礼拝している民ばかりであった。しかし、主はそれらの民を偶像礼拝のゆえに、裁き、呪つたかといえ、そうではなかった。主は、彼ら

¹⁾ 宣教学でよく使われる「文脈」に類似するものとして、解釈学者ガダマーは「地平」という述語を使う。しかし、その違いは用語だけではなく、解釈そのものの考へ方に及んでいる。ここでは、聖書を含む文学作品などの解釈を、作品の地平(文化・文脈)と読者の地平との融合と説明する彼の解釈にヒントを得ている。(ハンス＝ゲオルク・ガダマー『真理と方法 II』2008、法政大学出版局、参照)

か神の民イスラエルを支配しようとするとき以外、いたずらに手を下してはいない。すなわち、主は、彼らがまことの神を知らないで(霊的に死んで)偶像礼拝しているのであるから、彼らに寛容なのである²⁾。このことは、聖書に多くは書かれていないことを想像しつつ神学しなければならぬことを意味している。もちろん、聖書の神は恵み深く、憐れみに富む方であると書かれており、その神の寛容さは知りうることであるが、限定されたテキストから神の民以外の人々へのメッセージを汲み取ることがはむずかしいのである。

だから、求道者に説教しようとするならば、朗読した聖書テキストに書かれていることをストレートに語るだけでなく、その背後にある、すべての民の救いを射程としている神の働きを、聖書全体から語らねばならない。すなわち、彼らの生活文脈にあつて神を正しく理解でき、身近に感じることができようには、用語、表現を工夫するだけでなく、彼らの地平に融合する説教をしなければならないのである³⁾。

II. 「恵みにあふれた主なる神」を徹底的に語る

一般の日本人は、ほとんど聖書のこと、主なる神のことを知らない。彼らが教会に来て、聖書のことばを聞き始めたとしても、この神をなかなか理解できないのは不思議ではない。すべての人が、それまでの経験と知識から作られた神観で聖書を読み始めるが、聖書のまことの神の独自性、その大きき、恵み深さが説教を通して明確に教えられられないなら、なかなか、従来から抜け出せない。ところが、説教ではキリスト信仰による「生き方」を語るものが多いという印象を私は持っており、そのような説教の場合、求道者(未信者)は「聖書の処世訓」として受け取り、そのような生き方に合わせようとしてしまう。それは、キリストによる福音を信じて、神を「アバ」と呼ぶことのできる神の子になるステップを抜きにして、聖書の生き方を身につけようとする過ちに導きやすい。それを避けるためには何よりも、説教で「聖書のまことの神はどう

²⁾ 創世記4章のカインの子孫を初め、神に選ばれなかった民について考えてみると、わかるであろう。ヨナ書、ルツ記にも神のそのような性質が現されている。また、マタイ5:43~48、ローマ3:23~26、IIペテロ3:8~9などを参照。

³⁾ 使徒14:15~17、17:26~30にあるパウロの異邦人向け説教は、その好例である。

いうお方か「神はどのように働いておられるか」を繰り返し語りなげなければならぬと考える。

例として挙げたいのは、神の「摂理」である。神の「創造」については多く語られているが、それに比べ、私たちの毎日の生活においてより身近な「摂理」が、あまり語られていないのではないかと思う。そのひとつの理由は、摂理を「神が人の利益を慮って世の事すべてを導き治めること」(広辞苑)と同様、世界の保持と統治として抽象的にしか理解していないからだと思われる。これは、キリストによって主なる神を信じている者にとつては、もの足りない理解である。確かに、人間の墮罪にもかわらず、創造の神がその働きを止めることなく世界を保持し続け、歴史を導き続けているが、聖書が語る神の「摂理」となく世界を保持し続け、歴史を導き続けているが、聖書が語る神の「摂理」の働きはもつとダイナミックかつ身近なものである。摂理は、英語では Providence であり、「備える、与える、養う」を意味する provide の名詞形であるように、「私たちの生活のために神は、まどろむことなく必要なものを供給し、養ってくださっている」という教理である。有名な詩篇 121:4 に「見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない、127:2 に「あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる」とあるし、また、「人はパンだけで(パン自体で)生きるのはない、人は主の口から出るすべてのもの(摂理)で生きる」(申命記 8:3)とあり、暗唱される聖句のトプクラスであろうと思われる「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタイ 6:33)も、「神を第一にしなさい」と言い変えられて、生活における優先順位の教えにされてしまい、「人が神を第一にして仕えるならば、真実な神はそれに応えて祝福し、すべての必要を満たしてくださる」とつけ加えられがちである。この教え方は神と取引きする考えに導きやすく、それは非聖書的かつ異教的でさえある。キリストの福音はそのようなものではない。その前にあるマタイ 6:25 から見ると、イエスは、「空の鳥、野のゆりを見てみなさい。天の父はこれらを一方的に養い、装っておられる(摂理)。ましてあなたがたに、よくしてくださらないわけではないか」と語り「そうい

うわけだから(31節)のあと33節の言葉が続く。それは「キリストによって地上に開始された神の国(摂理と救済による恵みの支配)と、神の義(回復された神との正しい関係)を何にもまさって捜し求め続けなさい。そして、恵みに対する応答として感謝にあふれ、天の父との関係を大切にしたい生活が続けなさい。そうすれば、すべてのものが父なる神によって備えられていること(摂理)を体験するようになる」ということではないか⁴。すると、摂理の神、主を父(アバ)と呼ぶことのできるキリスト者になることがいかにすばしいかを、現実的に語るようになる。

III. 救いの豊かさの体系から、人々の必要に応じて語る

伝道説教といえ、すべての人は罪人であり、その罪を神に赦してもらわなければならない。そして、現に神は私たちを愛するゆえに、キリストを十字架につけて私たちの罪を負わせ、その罪を赦してくれた」というものが標準である。しかし、現代日本人に福音を語ろうとすると、このような標準的説教には問題がある。そのうちの重要と思われる二点を、図表く救いの構造(スキーマ)⁵を説明しつつとりあげよう。

まず、人の罪を語る前に、「神の像として創造された人」を語るべきである。なぜなら、求道者が「罪」について聞かされても、社会での通俗的な罪(悪事をす、法律を破る、穢れた思いを持つなど)しか想像できない。また、罪とは神に反逆していることだと言われても、罪責感が増しこそすれ、罪にある人間の真の悲惨は理解できない。では、どうすれば罪を聖書的に語ることができようか。まず、人間は本来「神の像」としてすばらしく創造されたものだという、聖書しか語っていないメッセージを語るべきである。聖書、特に創世記 2 章はそのことを具体的に、(1) 神の息が吹き込まれて霊のいのちに生き、(2) 神に創造された世界を治めて神の栄光を現す働きを委託されているもの、(3) 神との契約相手(応答責任者)として交わりを与えられたもの、

⁴ この「摂理」と「安息」との関係については、『牧会ジャーナル No.40』(2008 年)の特集「牧会者と安息に寄せた拙稿「聖書が教える『安息』の意味」を参照されたい。

⁵ 発題論文「伝道の結実—教会建設—」に記入した図表をご覧ください。

と語っている⁶。神に創造された人間のこのような栄光をしっかりと語るとき、人間観不在の現代人に聖書的で崇高な人間観を提供することができ、そして、現実の生活ではそのような人間として生きていけないという「落差」を感じさせることができる。これが真の罪人の悲惨すなわち(1)神との断絶、(2)霊的に死んでいる人生、(3)生きる目的の喪失、である⁷。

もうひとつは、救いを多面的に語ることである。上で、「神の像」の栄光とそれを毀損している悲惨を<救いの構造>の三つの概念で述べたように、聖書は、罪人の救いについて多くの用語とモチーフを使用して語っている。それはフルに生かして、現代人が直面しているさまざまな問題をその根源としての罪から説明し、その問題の根本的解決のためには罪の悲惨からの救いが必要かつ効果的であると語ることができはるである。(1)親子関係や自己アイデンティティ、職場や友人との人間関係などで悩んでいる人、世界の平和を求めている人たちには、神との関係回復(和解)を語る。(2)現代社会におけるいのちの軽さに戸惑い、死を恐れている人、自分の心の汚さと戦っている人たちには、キリストによる神の再創造を受け取るように勧める。さらには、(3)物質文明下において自分が価値あるものと感じられなかったり、毎日のきびしい労働条件下で疲れ果て、働き・生きることの空しさを感じたりしている人たちには、神の栄光のために生きることへの召命としての救いを紹介する。

そのように、キリストによる救いの持っている豊かさや多面性を会衆の必要と感性に応じて適切に語っていくとき、聖書は人間のあらゆる面について語っている神のことばであることが実証されるだけでなく、福音のメッセージがひとりひとりの心の琴線に触れる可能性は大きくなるであろう。

⁶ 詳しくは、拙著『現代を創造的に生きるために—創世記1~11章からの52の黙想』(いのちのことは社、2007年)の第8~16章を参照されたい。

⁷ この「罪人の悲惨」も創世記3章にみごとに描かれており、前掲書の第20~22章で解説している。